



教えて先輩！ 授業、舞台芸術公演、って何するの？

四国学院大学演劇コースでは最先端の演劇やダンスの授業を受けることができます。
中でも一番の目玉が、プロの演出家・振付家が1ヶ月程、学内に滞在し、
学生たちと作品を創って上演するという授業、
「四国学院大学アーティスト・イン・レジデンス・プログラム＝通称SARP」。

SARP 20回記念公演『義経記 REMASTER』が
実際にどのように行われたのか、先輩たちに聞いてみました！

『義経記 REMASTER』

2021年5月19日(水)～23日(日)

今回は木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一氏を
監修・補綴に迎えて本学准教授の西村和宏が演出、
阪本麻都が振付を担当し、源義経や
弁慶たちが活躍する
『義経記』の舞台化に
挑戦しました。



1985年、和歌山市生まれ。小学校3年生の時、上方落語を聞き衝撃を受けると同時に独学で落語を始め、その後、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学ぶ。2006年に古典演目上演の補綴・監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ、様々な演出家とタッグを組みながら創作のスタイルをとっている。2016年に上演した「動進帳」の成果に対して、平成28年度文化庁芸術祭新人賞を受賞。平成29年度芸術文化特別奨励金制度奨励者。令和2年度京都府芸術新人賞を受賞。



木ノ下裕一
木ノ下歌舞伎主宰・
ドラママツルク



1 Audition まずは、オーディション！

SARPでは稽古に先駆けて、学内オーディションを行います。キャスト希望の学生は演技、スタッフ希望の学生は面接で参加が決まります。

Q. オーディションでは何をやるの？

A. 演出家や作品によって求められるものが違うのでオーディション内容は毎回変わります。今回はテキストを使った朗読や「平家物語」をテーマに一人芝居を作ったり、音楽に合わせて走る・転ぶ・跳ぶなどの動きをやったりしました。その人が持つ身体性やキャラクターが『義経記』という作風に合うかどうか問われました。

オーディションが3日間あって、ドキドキするし、上手く自分を表現できず落ち込んだりもしたけど、みんなの特技も見れたし、盛りだくさんの楽しいオーディションでした！



ゆうり
(義経家来・駿河役)
愛媛県
松山東高等学校出身

2 Research オーディション通過！稽古前の「勉強会」もみっちり！



全体での勉強会の他に自分でも大化の改新～鎌倉時代を調べました。地図を見ながら、僕が演じる源頼朝が見た景色に想いを馳せたりして、役作りの時間にもなりました。

オーディションに通過し、ほっとしたのも束の間、すぐに「勉強会」が始まりました。木ノ下先生の「義経記」にまつわる歌舞伎や能のレクチャーから始まり、今回の大きなテーマとなる「道行(みちゆき)」についてのワークショップも行いました。グループに別れて、源義経にまつわる話を調べて大プレゼン大会も実施、みんなで知識を深め、作品理解に努めました。

しゅんせい(源頼朝役)
香川県・丸亀高等学校出身

ゆうな(語り役)
広島県・舟入高等学校出身



古典の世界では、目的地に着くまでの道程を地名や風景だけを積み込んで表現する「道行」という方法があることを初めて知りました。勉強会では、普通寺から大学までの「道行」をみんなで作って発表しました。いつも道る道なのにいろんな景色や物語があって、発見がいっぱいありました。

3 Rehearsal いよいよ、稽古開始！

『義経記』を原作としたオリジナル作品なので、稽古をしながら台本が足されていきました。毎日、台本が増えるので、セリフを覚えて、動きを覚えて、キャストは大忙し。台本作成は木ノ下先生が主に担当されましたが、それを助けるべく補綴(はてつ)助手の学生が大活躍しました。

Q. どんな稽古をしますか？

A. SARPでは1ヶ月程度の稽古期間を設けています。まずは台本を座って読む「読み合わせ」。意味の分からない言葉やセリフのニュアンスを演出家や共演者と共有します。その後は、「立ち稽古」。最初は台本をもったまま、立って動き、セリフを覚えるのと台本を離し、シーンを繰り返して、体に落とし込んでいきます。今回は能の「すり足」を取り入れた基礎トレーニングも毎日行いました。演出家や作品によって稽古方法が違うことを知れるのもSARPの魅力の一つです。



高校の部活とは全然違って、プロの現場って感じがして、一つ一つが新鮮でした。毎日、段々とお芝居が仕上がっていく様子が面白くて、先輩たちの演技も間近で見ることができ勉強になりました。

木ノ下さんが台本を作成するにあたって、補綴助手として時代考証をしたり、義経たちが通った道や原作に出てくる名所を調べたりしました。登場人物がいた山の木や動物まで調べたりして、細部までこだわることになりました。あまりに大学の図書館に通ったので、図書館司書の方と仲良くなりました(笑)



くわちゃん
(義経家来・鶴尾役)
大阪府・大谷高等学校出身

はるか(補綴助手)
福岡県・ひびき高等学校出身



5 Performance 晴れて本番！

1ヶ月にわたる稽古を経て、いよいよ本番です。SARPは授業の発表公演でありながら有料公演で行います。全力で2時間の上演を駆け抜ける学生たちの姿は、観る人たちに多くの感動を与え、千秋楽ではトリプルのカーテンコールをいただきました。



僕は演出家を志望していて、演出助手という仕事をしました。スケジュール調整や演出の記録など稽古や本番で必要のことをします。広い視野でプロレベルの稽古に立ち会うことができたので多くのことを学ぶことができました。

かつしゅう
(演出助手)
鹿児島県
開陽高等学校出身



すぎたくん
(源義経役)
山口県
西京高等学校出身

史実や文献を調べれば調べるほど、「この人たちは確かに生きていたんだ」と実感させられ、実在する人物を演じることの難しさを感じていました。義経の没落を描く作品なので、精神的にも追い込まれることが多かったのですが、だからこそ支えてくれる仲間たちの有り難みも感じられ、舞台の上では義経として彼らと共に走りることができました。言葉にできない不安や孤独、苦痛を、誰しもが抱えているご時世ですが、そんな人たちに對して「頑張れ」と励ますことはできないまでも、「辛いよな」と溜め息を吐き合うことはできる、お客様に共感してもらえるような「義経記」になったのではないかと思います。



ふくか(照明担当)
香川県・高松西高等学校出身

高校生のときに、ダンスの発表会で照明が綺麗で照明に興味を持ちました。そのときの照明が今回のアドバイザーの西山さんで、大学で直接教えてもらえるとは夢にも思っていなかった。プランも本格的なオペレーションも初めての挑戦で大変でしたが、やりがいと達成感を感じました。

4 Technical Rehearsal 照明や音響、舞台美術が加わった稽古が始まります。

大学内には本格的な劇場、ノーススタジオがあります。そこで、舞台美術を組み、照明機材や音響を仕込んで本番に近い形で長期間にわたり稽古できるのはSARPの大きな魅力です。スタッフをメインに担うのは学生たちです。それにサポートする形でアドバイザーとしてプロのスタッフが関わります。



ゆきの(衣装担当)
高知県・高知工業高等学校出身

Q. 舞台スタッフをやりたい！初めてでもできますか？

A. はい、できます。今回スタッフとして参加した学生もほとんどが入学後照明や音響、舞台美術を始めました。また、スタッフ業を専門的に学ぶノースプロダクションという学生団体もあり、卒業後、照明家、美術家、プロデューサーとして活躍したり、映像会社やイベント会社に就職するなど、様々な分野で頑張っています。

衣装に和のテイストの装飾を施したり、着物の端切れを使って結製装(ゆいけき)などのアイテムも作ったり、作業量も多く大変でしたが、舞台上で衣装を着たキャスト陣はとてもキラキラしていて、頑張った良かったと思いました。

卒業生からのメッセージ



橋本潤
(劇団民楽 演技部 研修生)
香川県・三本松高等学校出身

卒業後は、西村先生主宰の劇団サラダボールに所属し、舞台や地元企業の映像作品に出演しています。今回は、現役生に混じって、走ったり、踊ったり、とても楽しい時間でした。首都圏に行かなくてもできること、ここでできないことはいっぱいあると思います。みなさんも入学したらぜひ、いろんなことにチャレンジしてください。



高橋なつみ(劇団サラダボール)
(神前前役)福島県
いわき総合高等学校出身



学生時代に木ノ下さん監修のSARP vol.16「平家物語 REMASTER」に平知盛役で出演しました。ノーススタジオだけでなく、愛媛県にある百年続く芝居小屋、内子座でも公演できて、貴重な経験ができました。現在所属している劇団民楽の「どん底-1947-東京-」に出演が決まっていたので今回は参加できませんでした。今でも、SARPでの経験は自分の大きな支えになっています。演劇コースに入ったら、ぜひSARPに関わって学生時代からプロの現場をたくさん体験してください！



過去のSARP作品



SARP vol.17
「mizugawa/madogiwa」
作・演出：藤田貴大
客演：川崎ゆり子
2019年9月14日(土)、15日(日)

マームとジプシー主宰・演劇作家の藤田貴大が作・演出を担当。水際・窓際に関する学生たちのエピソードをインタビュー形式で集めて一つの時間を紡ぎ、切なくて淡いオリジナル作品を制作しました。プロの俳優として活躍されている川崎ゆり子氏とも共演し、貴重な経験となりました。

演出家からのメッセージ

あの夏の終わりにみんなに会えて、否応なしに思い出された、あのころ先が見えなくてどうしようもなく苦しかったこと、けれども闇雲に生きたこと、夜になると山々のシルエットが、深い紺色を背景に浮かびあがるあの環境にて、静かに観察するように製作した時間のこと。ぼくは忘れられない、これらもすべて影響されるでしょう。あらためて、あの場にいたみんな。ありがとう。



SARP vol.18
「星の祭に吹く風」
作・演出：小池竹見
脚本協力：TOHOKU Roots Project
2020年10月3日(土)～6日(火)

双数姉妹主宰、テレビやコスプレの舞台演出を手がけるなど幅広く活躍する作家・演出家の小池竹見氏を招き、「風の又三郎」をモチーフにした作品を上演しました。舞台美術のデザインも学生が担当し、天井から吊るした紙テープで風を表現するなど工夫を凝らした美しいセットを稽古の合間を縫って作成しました。

演出家からのメッセージ

「風の又三郎」を題材に描いた、都市からの風が振り回される小さな町のお話でした。「この施設(作物・生産物)を作れば、町はにぎわいを取り戻しますよ」などと甘く語って、何十年かに一度、全国に吹き渡る大きな風は、一時のにぎわいを生んだ後に多くのものを奪っていきます。これから先、風は何度も吹くでしょう。その時、奪われてはいけないうか、「ミツ」が見え続ける目を持ってほしいのです。学生のみならず、あれから、ちゃんとミツしますか？どれだけ準備を重ねても「今日」になってはじめて見える・聞こえる何かがあります。見えないうちをやり過ぎず、ミスを恐れず、受け入れて変化してほしいです。



SARP vol.19
「S高原から」
作・平田オリザ
演出：山内健司
2020年12月17日(木)～20日(日)

主に俳優として活動されている、山内健司氏(青年団)を演出に迎え、俳優視点の演出で平田オリザ氏の代表作「S高原から」に挑みました。学生たちは、山内氏による「アリスム演技の言葉」について考え、その価値を学ぶワークショップを体験しながら俳優としてのスキルを磨きました。

演出家からのメッセージ

俳優をメインでおこなっている者がSARPを受け持つことは稀かと思いますが、今回私は、私にしか埋めることのできないピースを差し出したいと考えました。それは「うまくならない」という気持ち。最近ではネットで大量に見られるアメリカのドラマ、あるいは世界を席巻する韓国映画などで若い俳優がすみずみに至るまで、とにかくうまい。映像と演劇という違いを両国の教育機関では、演じる基本において区別をしないようです。あのアジアやヨーロッパの若手たちと勝負していくってほしい、遊んでほしいと願っています。日々の創作はただただ歯がゆくて、情けないものはかりと向き合っていく必要があります。夢中になって取り組んで、ふと目をあげた時「うまくならない」という景色がみえればいいと思います。



四国学院大学十青年団
「カガクするココロ」
作・演出：平田オリザ
2021年1月27日(水)～31日(日)

平田オリザ氏の初演出で、プロの俳優四人と共演をしました。積み重ねられた細やかな稽古の上に成立するリアリティある演技・群像劇は観客に大きな驚きを与えました。また、江原河時劇場(兵庫県豊岡市)でのツアー公演も実施し、プロの俳優・スタッフを目指すにあたり大きな自信に繋がりました。

演出家からのメッセージ

正味の稽古時間は短かったですが、非常に集中して作業が進められたと感じています。四国学院大学演劇コースの十年間の集大成として、クオリティの高い舞台に仕上がったと自負しています。学生たちは、淡々と繰り返される稽古によく耐えて、自分なりの表現を見つけてくれました。またプレ稽古、オーディションなどから数えると半年以上にわたるプロジェクトの中で、プロフェッショナルの仕事の進め方に触れていただけではないかと思っています。